名作の故郷、修善寺を訪ねて

YonHo SUH(徐淵昊 : Professor Emeritus, Korea University)

✉ kdramasyh@naver.com

(韓国)高麗大学校名誉教授。著書に『韓国演劇史(近代、現代)』(ソウル: 演劇と人間, 2003・2005)、『韓国演劇史』(日本: 伊藤好英・村上祥子共訳, 朝日出版社, 2009)、『韓国の伝統芸能と東アジア』(日本: 中村克哉訳, 論創社, 2015)、『韓国公演芸術の歴史と未来展望』(ソウル: 民俗苑, 2018)、『21世紀韓国公演芸術の様式と現場』(ソウル: 演劇と人間, 2019)等多数。

Visiting Shuzenji Village, the Birthplace of a Masterpiece

On February 7, 2007, I visited Shuzenji Village, located in the northwest of Izu City in Shizuoka Prefecture. I decided to visit this town due to my desire to learn about the region where Kido Okamoto's *Shuzenji Monogatari*(1909), which influenced Sedeok Ham's *Emile Bell*, is set. In the village is the small and simple Shuzenji temple, which was originally built by Kobo-Daishi, the founder of Shingon Buddhism, in 807, and which was rebuilt by Zen Master Ryukei in 1489.

Shuzenji Monogatari is based on the historical event of the imprisonment in Shuzenji and murder of Yorie Minamoto, the second shogun of the Kamakura Shogunate, by his maternal relatives, the Hojo clan. This three-act play is about the relationship between three main characters: Shogun Yorie, master mask carver Yashao, and Yashao's eldest daughter Katsura, who dreams of attaining higher status. It is structured around Yorie's recollection of this event as "the uncle incident." The first act of the play is set in Yashao's studio, and the second act focuses on the beginning of the tragedy taking place around Katsuragawa. In

the third act, we return to Yashao's studio, at which point Kaete runs in yelling about an ongoing night raid.

While at Shuzenji Village, I visited the main settings of this play, including Katsuragawa's riverside, the hot spring baths, the shogun's tomb, and Jiwojjeon, and I wandered the alleys. On this tour of the village, I was moved by the efforts made by the people of Shuzenji Village to perfectly preserve the historical sites and the surrounding nature. It was a reminder to me that artists equipped with pure creativity are the true cultural font of humankind, regardless of their race.

Keywords Shuzenji(修善寺), *Shuzenji Monogatari* (修禪寺物語), Kido Okamoto(岡本綺堂), Ichikawa Sadanji(市川左團次), Yorie Minamoto(源頼家)

2007年2月7日、私は伊豆市の西北に位置する修善寺を訪れた。品川駅で特急に乗り、南方面の伊豆半島に沿って2時間をかけて走った。ソウルはまだ冬から目覚めてはいないが、修善寺の町では、すでに所々で梅が花を咲かせていた。大学を退任したばかりで、少し気持ちに余裕を持って修善寺を訪ねることになった。私は1999年1学期、高麗大学大学院の講義で岡本綺堂の「修禪寺物語」(1909)を討論作品の一つとして選定した。日本で学問を修めた成世徳(ハム・セドク)がこの作品の影響を受けて創作したという「어밀레종」(エミレの鐘・1943)との比較研究が重要な課題であっただけではなく、名作として知られる「修禪寺物語」の正体を知りたいという意気込みを持っていたからである。

駅からバスに乗り換え狩野川を渡って20分ほどが過ぎた頃、谷に入り、町の入り口でバスを降りた。寺の前に流れる小さな小

川が桂川である。桂川は狩野川と合流し、文字通り昔の狩場を連想させ、広く涼やかな川辺を挟んで勢いよく流れる。この一帯が修善寺自然公園と呼ばれているということを後になって知った。狭い田舎道を挟んで、旧い家屋がちらほらと残っている。小川のほとりで、北の方角に見える低い山裾にそびえ立つ寺の門が目に入った。「修禅寺物語」の背景にもこの山門が見える。明け方から煩雑な文明に苦しみられていた私は、次第に鎌倉時代に戻っていった。

修禅寺には本堂と付属堂、寮舎、鐘楼堂と宝物殿などがある。建物は小さくこじんまりとしており、素朴なのが特徴といえど特徴である。この寺は807年に真言宗の弘法大師が創建し、1407年には大火に見舞われる悲運に遭ったりもしたが、1489年に隆溪繁紹禅師が再建し曹洞宗の寺となり今日に至る。過去の足跡は宝物館で見ることができた。源頼家将軍の母親、北条政子が寄贈したという宋王朝時代の刺繍が施された釈迦如来が微笑んで客を迎える。不幸にも犠牲になった息子の極楽永生を願う母親の心が見えるようである。

私の視線は自然と陳列された古い面と公演資料にしばらく釘付けになった。古い面は半分に切れている状態だが、卓越した彫刻技術をうかがわせる。この仮面がきっかけとなって創作された「修禅寺物語」の公演資料は、夜叉王役を務めた歌舞伎役者、二代目市川左團次の夫人が後日、寄贈してくれたのだという。左團次は作家とともに、江戸歌舞伎ではなく創作歌舞伎の開発に力を注ぎ、歌舞伎の近代化に大きく貢献した新歌舞伎の第一人者である。そして近代演劇の父と言われる小山内薫とともに新劇の樹立に寄与した先

駆的な演劇人でもある。新劇の樹立を目指した大阪の「自由劇場宣言」が発表されたその年に「修禅寺物語」は東京の明治座で初めて公演が行われた。江戸歌舞伎を越えて新歌舞伎と新劇を貫いた市川左團次の卓越した役割を考えてみれば、このような業績は決して偶然であったとは言えないのである。

この作品は、鎌倉幕府(1192-1333)が開かれ二代目将軍になった頼家が、母方の勢力である北条氏によって修禅寺に幽閉され殺害される歴史的事件が背景になっている。彼は将軍になって2年後の1204年に、22歳の生涯を終えた。町の北側の丘には源範頼の墓がある。範頼は鎌倉幕府を樹立した頼朝の実弟で、兄とともに多くの戦争で殊勲を立てた将軍だった。しかし幕府が樹立された後、反乱を企てていると誤解されこの信功院に幽閉された。彼は結局自殺してしまったのだという。「修禅寺物語」で頼家が“叔父の事件”として回想した内容である。無常なのは政治権力だが、人間はその権力意識から脱することができないのが属性であり限界のようである。九百余年が過ぎた今日においても権力争いの蛮行には依然として変化が見えない。

かつて修禅寺を訪れた岡本綺堂は、出所が明らかでないと伝えられてきた古い面を見て強い印象を受けたという。彼はこの仮面を頼家の顔に見立てて創作をすることにした。将軍頼家と桂川の近くで仮面を作る匠の職人である夜叉王、そして高い位に上ることを夢見る夜叉王の長女桂の3人の関係を中心とするこの作品を構想することとなった。舞台で公演されると、日本ではもちろんのことフランス、ロシアなどで翻訳公演されるほど名作という評価を受けた作品で

ある。作品の中で頼家は短い運命を予感したかのように、夜叉王が木で削った自分の仮面を持つことを願う。当時夜叉王は、最高の隠れた名人と言われる人物だったからだ。

「修禅寺物語」は3幕で構成された。第1幕は夜叉王の作業部屋を中心に展開される。長女の桂と妹の楓(かえで)が自分たちの不幸な境遇に対して文句を言う。父と夫(春彦)の仕事の手助けをすることに熱心な楓に比べ、桂は新しい夢に浮かれている様子である。頼家が家来たちを連れて夜叉王のもとを訪れる。彼は半年前に依頼した自分の仮面がまだ完成していないことに不満をぶつけ、厳しく叱責をする。これに対して夜叉王は「私の気に入らない作品を世の中に残したくない」と言い、頼家に待つことを求める。しかしせっかちな頼家は家来(五郎)が持っていた刀を抜こうとする。その瞬間、桂が前に進み出て「仮面はもう作られている」と言う。仮面を受け取った頼家は満足している。しかし夜叉王は「何度作っても生きている気配がなく、目に恨みを持って誰かを呪う顔」だと言い、「本当に望むのなら」仕方がないという姿勢を見せる。頼家は、仮面だけでなく桂をも連れて満足しながら旅立つ。

第2幕は同日夜、桂川周辺で悲劇の前哨戦が繰り広げられる。頼家と桂が美しい川辺で月の光を受けながら親密な時間を過ごすうちに起きる事件である。頼家は桂に新しい妻として迎えるという約束をし、母方の親族である北条氏とのこれまで経験した悲惨な葛藤を吐露する。二人に明るい未来が訪れることを願ったまさにその時に北条氏が送った刺客によって雰囲気はまた反転し、その後起こる悲劇が暗示される。春彦は偶然この事件の目撃者となる。

第3幕は再び夜叉王の作業部屋で、緊迫したまま続いてゆく。楓が外から飛び込んできて夜襲が起きたことを知らせ、夜叉王は「誰の喧嘩であれ、自分たちは避難するより他ない庶民なのだ」と言う。そこに春彦が帰ってきて、北条氏が起こした反乱事件を目撃したと知らせる。そして桂が刃物で傷つけられた姿で現れ、妹夫婦に助けられる。桂は父親が作った頼家の仮面を被り、将軍の服装をしている。彼女は将軍が入浴をしている最中に襲われたことを知らせ、自分は将軍を装って戦ってきたことを話す。それとともに彼の恋人になったのだから、後悔や心残りはないと言って息をひきとる。夜叉王は亡くなった長女かつらの上体を楓夫婦に起こしてくれと言い、桂の最期の姿を筆で描く。彼は狂ったかのように満足げに笑いながら言う。「仮面は何度も私が新しく作ったものだが、われながら素晴らしい！ 天下一だ！」

作品の舞台となった桂川の川辺、旧い家々の間の路地、将軍が沐浴した温泉(独鈷の湯)、将軍の墓、将軍の母が息子のために建てた指月殿などをゆっくりと歩いて見て回った。窓ガラス越しに小川を眺めながら、昼食に蕎麦を食べた。修善寺を歴史的な現場として描いた作家は岡本だけではない。「赤蛙」の島木健作、「門」の夏目漱石、「伊豆の踊子」の川端康成なども思い出される。修善寺の町を後にしながら、歴史の現場と自然をそのまま保存しているこの地の人々を、非常に尊敬できると思った。私は創作精神が明らかな芸術家たちこそが、人種に関わらず人類の文化遺産だと確信する。